

---

# 出会い

y t

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出会い

### 【コード】

N00200Q

### 【作者名】

y t

### 【あらすじ】

エアリスはクラウドと出会う以前に、ザックスと出会っていた。そのときの気持ちは嘘ではない。ただ、ゆっくりと薄れていく彼の記憶がたまらなく切ない。あらがえない時の流れの中で、彼女ははつきりと自覚する。

(前書き)

このお話は『エアリス好きさんに50のお題』<http://www.geocities.jp/maron4121/FF7/muriodai.html>

からお題をいただきました。管理人様に感謝いたします。

以前投稿した『男と女』と違ってシリアスです。

ラブラブな描写はありません。あらかじめご了承ください。

朝起きると、窓から陽が差していた。

上層のプレートのせいで、わたしたちが暮らすスラムの日照時間は極めて少ない。それでも、家の裏手にある庭園は植物たちで賑わっている。わずかな陽差しでも、懸命に生きようと天に向かって両手を広げているみたい。

珍しく夢を見た。もうけっこう前の夢。最近は見ることなくなっていたけど、彼が行ってしまった直後は毎日のように見た夢。

目が覚めるたびに、彼が帰ってくる兆しなのかなと思って、教会の花畑を世話するついでに駅に足を運んだ。すごい女の子好きなやつだったから、きつと任務先でいいコ見つけてそのまま居座っちゃったんだと思う。別にそれはそれで構わない。けど、一言くらい連絡くれても、いいと思う。あいつがわたしのこと、どんな目で見たのか分からないけど、少なくともわたしたちはトモダチだった。初めて、同じくらいの年齢で、しかも男の人のトモダチができたから、舞い上がったのかな、わたし。

寝起きでボサボサの髪の毛を鬱陶しく思いながら、わたしはパジヤマを脱いだ。乾いた空気が、わたしの腰から上を包む。少し、寒いかな。自分の体を見下ろす。中途半端な格好。何だかおかしくて、下も脱いでしまった。同世代の女友達がいらないから、わたしは自分のスタイルがどうなのか比較対象がない。たまに街で見上げる看板で、挑発的なポーズをとるモデルの女の子たちは、でかでかと自慢

の胸を強調している。

ザックスも、やっぱり大つきい方が好きだったのかな。

お世辞にもわたしの胸は大きいとは言えない。と思う。あいつがいなくなってから5年。わたしは22歳になった。さすがに17歳の頃と比べると、わたしの胸はけっこう大きくなっている。下着の上から、乳房の輪郭をそつとなぞった。「ばかなやつ」部屋に響く声。

好きだったのかもしれない。でも本当のところ、わたしはあいつをどう見ていたのか覚えていない。ただ、あいつの帰りを待つ5年はとても長かった気がする。心がざわざわして落ち着かない日ばかりだった。教会で花の世話をしている、ひよつとして入口からザックスがひよつこり現れるんじゃないかと思つて、何度も振り返つてしまう。そういうわたしを自覚するたびに「ああ、きつと好きだったんだな」と気づかされて、いやになる。

もしあいつが帰ってきたとして、わたしはどんな顔で会えばいいんだろう。

彼女がいるかもしれない。それなのに、わたしと会ってくれるのかな。5年前のわたしが気づいていた感情は「もつと一緒にいたい」だけだった。何通も何通も手紙も送った。けれど、返事は一度も来なかった。

もう少しだけ、一緒にいられたら、きつとわたしは。

服を着替えて、髪をとかした。数少ないわたしの自慢。鏡に映るわたしの髪は、朝陽に照らされて湖面みたいに光っている。櫛を置いて、いつものリボンで髪を結んだ。今となつては、このリボンだけがわたしとザックスを結ぶもの。買つてもらった当時と比べると、幾分色褪せてしまつてはいるけど、大切に使つてきた。これ

を身につけていると、何だかひとりじゃないような気がしてくる。あいつがそばにいて、私の髪を撫でてくれているような、そんな気持ち。一度も、そんなことしてくれたことなかったけどね。

部屋を出て、一階のリビングに降りた。お母さんはいつも通り、朝食の準備で忙しそう。「おはよ」わたしは母さんの背中に言った。子どもの頃、いつも背負ってもらった。今、こうして見てみると、何て小さな背中なんだろう。

「おはよう。今朝も行くんだろ？ 早く食べちゃいなさい」  
「うん、ありがとう」

わたしはそう言って席に着く。

5年間繰り返し返されてきた、変わらない日常。不満なわけじゃない。こうしてお母さんと二人でいる時間は大好きだし、いつまでも続けばいいと思う。

でもわたしは欲張りだから……。もう一人だけ、この日常の絵に書き足して思い描く。

願うと叶わなくて痛いけど、思うだけなら誰も傷つかない。わたしがこの5年で会得した技術みたいなもの。それがとても滑稽で、未練らしいことなのは、ちゃんと分かっている。だから誰にも言わない。口にも出さない。わたしだけの、くだらない妄想なのだから。本当は……。

わたしは、きっともう二度とザックスに会えない。

そう思っている自分もいる。それは妄想なんかじゃない。教えてくれた。誰なのかははっきりしないけれど、木々のざわめきが、風

の囁きが、雨の鼓動が、大気の息づかいが、この世界に存在するあらゆるものが、わたしに届けてくれた。その『声』は直接、わたしの心に沁みだ。それを聴くことができるわたしは、妙に達観してしまっている。あいつが伝えようとした『声』を、しっかりと受け止めることができる。

でも、ザックスが「エアリス」と呼んでくれたわたしは、そんなの絶対認めない。これまでに、たくさんの方が大きな『うねり』になつていくのを、わたしは感じてきた。きっとわたし自身もいつかそうなる。心の底から、このサイクルを当然の真理として受け止めてきたのに、わたしは、ザックスがそうなることを望んでいなかった。わたしの中に相反するわたしがいて、駄々をこねている。そんな気がした。

家を出て、教会までの道を歩く。毎日あそこの花畑を手入れするのが日課。伍番街スラムは、朝から人通りが多かった。『上』の人たちはたぶん、スラムの人たちを怖いと思ってる。でも、それはわたしたちから見た『上』の人たちも同じだよ。わたしからすれば、神羅の兵隊さんやソルジャーの方が怖い。そりゃ、スラムにはちよつと手荒なことする人とか、悪戯好きな子どももいるけど、でも、わたしはスラムが好き。わたしはここで育って、ザックスに出会えたんだから。

教会の扉を開くと、何だかいつもと様子が違うことに気づいた。何だろう。

いつもより、空気がざわざわしてる感じ。わたしの胸の奥が、波打つみたいだ。

その理由に、わたしはすぐ行き当たった。教会の中心にある花畑に、誰か寝てる。せつかく咲いた花を潰しちゃってる。けど、花た

ちは怒っていないみたいだった。ゆつくりと、花畑に近づくと音がした。上を見る。見事な大穴が口を開けていて、へし折れた柱の木片が降ってきた。

落ちてきた？

どこから……。

「もしかして、プレートの上？」

なぜすぐそう思い当たったのか。たぶん、以前に同じようなことがあったからだ。わたしの足は自然と軽くなって、その人に近づいた。きつと、期待していたんだ。そこに寝ているのは、あいつかもしれないって。

でも、違った。

傷だらけだけど、すごく整った顔立ち。鼻筋が真っ直ぐ伸びてる。女のわたしから見ても長い睫毛。特徴的な、ツンツンした髪型。綺麗な金髪。何だかチョコボみたい。寝ていたのは、ザックスじゃなかった。見たこともない、男の人だった。まじまじと顔を覗き込む。ザックスとは、ちつとも似てない顔。どちらかというと、この人の方が好みかもしれない。そこまで考えて、わたしは我に返った。早く手当てしないと。プレートからかどうか分からないけど、あの天井の穴は間違いなくこの人が空けたものだろう。病院に運ばなきゃ……。

でも、どうしてだろう。

この人から、目を離すことができない。わたしの中がざわつき始める。寝顔を見つめていると、胸が苦しくなった。気がつくと、わたしは手を伸ばしていた。男の人の頬に触れる。とても、温かい。

よかった。まだ、ちゃんと生きてる。

もっとよく顔を見たいと思って、ほとんど覆い被さるようにして彼に近づいた。すると突然、どこからか水滴が落ちて、ちょうど彼の目尻に弾ける。驚いて上を見たけど、吹き抜けたいになっってしまった穴からは、気持ちいいくらいの陽が差ししていた。この教会も、プレートから差し込む僅かな陽光の恩恵を受けている。

もう一度彼に視線を落とす。水滴が流れて、彼のなだらかな皮膚を滑っていった。

そこで初めて、わたしはこの水が、わたしから出たんだと悟った。止めようとしても、次から次へと溢れてくる。ぼたぼたと、雫が彼の顔に落ち続ける。どかなくてはと頭では分かっているのに、どうしても、離れることができない。

きっと、これはわたしの中の『わたし』が原因なんだ。

ザックスの思い出が、優しい声が、無邪気な笑顔が、涙と一緒に流れ出してきた。

そっか。

あなたが、連れてきてくれたんだね。

きつともうすぐ、この感覚は消えてなくなってしまう。星のざわめきも、しばらくは聴こえなくなるのだろう。そうしたら、この人を起こさなきゃ。それからどうしよう。でもまず、この涙、止めなきゃね。

ザックスが「エアリス」と呼んでくれたわたしは、いつでも笑ってないといけないから。でも今だけは……この出会いは……泣かせてね。

わたしは彼の頬に触れ、おかえり、と言った。この言葉を、きくとわたしは忘れてしまう。明日のわたしは、覚えていない。ねえ、聞こえてる？ わたしの声は、あなたに届いていますか？ ちゃんと約束、守ったんだね。ザックス、おかえり。

それと……。

さよなら、ザックス。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0020q/>

---

出会い

2011年1月11日21時04分発行